

家庭生活における世代間の相互作用に関する研究

平田 道憲 岩重 博文 木下 瑞穂
片山 徹之 一ノ瀬孝恵 日浦美智代

はじめに

われわれは、衣食住、保育、家庭経営といった家庭科教育における各分野の総合を目的として、栄養と運動のバランスからみた健康管理を生徒に理解させるための教材化の開発を試みた¹⁾。この研究では、主として家庭管理学の分野と栄養学の分野の総合を検討した。

健康管理に限らず、現在の家庭科教育があつかうべき問題を検討していくと、各分野の総合という視点なしには教材化が困難な問題が数多くあることに気づく。1989年の改訂でとくに高等学校家庭科において重点を置いて学習すべき内容であるとされた「高齢化社会」あるいは「消費生活」の教材化には、総合的な視点が不可欠である。

本研究においては、栄養と運動のバランスからみた健康管理に関する研究の経験をふまえ、栄養を中心とする食生活の分野における高齢化社会の問題を教材化することを考えた。そこでの鍵概念は世代間相互作用である。

祖父母との同居は生徒の食生活、栄養摂取にどのような影響があるであろうか。広島大学附属小学校、広島大学附属福山中・高等学校で実施された調査において、祖父母との同別居による食事メニューの注意事項の相違として、同居の場合に「祖父母の好みを生かすようにしている」、「祖父母用に柔らかくしてあげるなど区別して準備している」の2項目があげられている。同じ調査において、夕食献立については、同別居による相違がほとんどないことが指摘されている²⁾。

高齢者にあわせた献立は、中・高校生を含む小児の成人病（生活習慣病）的变化の発生が問題となる中で中・高校生の食生活をいい方向に向けるであろうか。あるいは高齢者にあわせた献立は中・高校生の食生活を不満なものにしてしまうであろうか。

このように考えると、中・高校生の食生活における世代間相互作用は、必ずしも生徒と高齢者との相互作用だけでなく、生徒と両親世代との相互作用をも含むものとしてとらえるべきである。祖父母、両親、生徒本

人、きょうだいなどの家族成員の間で食生活をとおしてどのような相互作用があるのか。あるいは家族の中の個人の強調という形で相互作用が弱まっているのか。

本研究では、食事内容、嗜好といった栄養面に加えて食事の取り方、献立などにおける世代間の関連を調査することによって、家庭管理学的な側面を加味した食生活上の世代間相互作用をとらえようと考えた。

1 研究の枠組

家庭科は家庭生活に関する内容を教育的見地から体系的に編成した実践的教科であり、その対象は家族を核とする人間の生活である³⁾。したがって、家庭生活を中心とした人間生活に対する実践的育成がその目的と考えられる。家庭科のバックボーンともいえるべき役目を果たす学問が家政学であるが、家政学の研究成果は家庭科という手段を通して、児童・生徒の生活、ひいては広く人間生活の向上に貢献しなければならない⁴⁾。家政学は「家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。」と日本家政学会は定義している。家政学から家庭科の流れをまとめてみると「家庭生活を中心とした人間生活を実践的、総合的に研究する科学である家政学の内容をもとに、家庭科を通して、児童・生徒の生活、ひいては広く人間生活の向上を目指す。」ことになる。実際、高等学校学習指導要領解説の「家庭一般」の目標には、「衣食住、家族、保育などに関する基礎的・基本的な知識と技術を家庭経営の立場から総合的、体験的に習得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と態度を育てる。」とあり⁴⁾、上述した内容ときわめてよく一致しているように思われる。

しかしながら、著者らは数年前から、家政学や家庭科が必ずしも「実践的」といえない面があり、その理由としてデカルトが実生活と学問による真理の探究を区別しているように⁵⁾、「科学」の思想と「実践性」と

Michinori Hirata, Hirofumi Iwashige, Mizuho Kinoshita, Tetsuyuki Katayama, Takae Ichinose, and Michiyo Hiura: A Study on the Intergenerational Relations in Family Life

ということが、人間生活を対象とした場合に容易に融合しえない面があるからではなかろうかと推察してきた⁶⁾。一般的に科学はある現象を理解するために細分化、単純化する方向に進んで行き、精度や普遍性を重視しているように思われる。応用科学においては、これらの真理を再構築して利用する立場をも合わせていると考えられる。応用科学であると考えられる家政学が対象とする人間生活は、きわめて複雑な現象であり、科学的理論を簡単に応用することは困難なことであろう。したがって、家庭科が目標とする人間生活における実践的育成も同様に困難であると考えられる。

家庭科がより実践的であるためにはまず、家政学あるいは家庭科の定義や目標にもある「総合性」ということに真剣に取り組まざるをえないと考えられる。高等学校学習指導要領解説の「家庭一般」の目標にある「家庭経営の立場から総合的」という考え方が弱く、たんに各分野の基礎的・基本的な知識と技術の習得という部分の比重が強いように感じられるからである。言い換えるならば、総合的というよりもむしろ、各論の集積といった印象を与える面が存在するように感じられるのである。人間生活は様々な事象がきわめて複雑に入り乱れた現象である。家庭科がたんに科学的真理や理論の追及に対する態度の育成ではなく、人間生活に対して実践的であるためには、「総合的」という部分を真剣に考える必要があると思われる。このことをさかのぼれば、家政学もまた「総合的」とは言い切れない面が存在し、人間生活に対して「実践的」とは言い難い面が存在し、同様なことがいえるのかもしれない。

さらに、人間生活は複雑であると同時に普遍性に乏しい、頼りない現象であるとも考えられる。したがって著者らは、人間生活における実践性を考える場合に科学的思考とは必ずしも相容れないであろうと思われる「おおまかさ」あるいは「アバウト」な思考も重要となるのではないかと考えている。

他方、現代のわが国は生活様式の著しい変化のなかでいまだ経験したことがないような高齢化社会を迎えようとしており、21世紀初頭には、65才以上の高齢者の全人口に占める割合は20%を優に超えると予測されている。このような状況をうけて家政学においても各分野で高齢者に関する研究が多くみられている。食生活分野においても高齢者と食に関する研究は少なからず存在する。したがって、世界的にみても理想的な食環境にあるといえるわが国において、高齢者に栄養的に理想と思われる食を提供することは可能なことであるかもしれない。しかしながら、ひとたび実践的という面から考えると食生活もたんに栄養的側面のみでな

く複雑な要因が関係してくることになり、理想的な食を提供しようということのみでは簡単に説明しえなくなる。すなわち、高齢者とは嗜好においても栄養的側面においても異なる同居する若い世代に、食物という物質的側面だけでなく、共に食事をするをとおしての精神的側面からも影響を受け、影響を与えることは十分に考えられることである。食分野においては高齢者にかかわらず、乳児期、青年期および成人期などとして各世代別での食生活についての研究や考察は、以前より存在する。しかしながら、食生活における世代間の相互作用といった研究やそれに対する理論はほとんど見当たらない。このような問題が食分野のみの範疇を逸脱した内容であると同時に、より総合的な問題であるためかもしれない。

本研究においては高齢化社会の到来を鑑みて家庭生活とりわけ食生活における世代間の相互作用について家庭科への還元を念頭におきつつ、主として栄養学と家庭管理学が連携して検討した。

II 調査の概要

本研究を進めるために、研究方法として次に示す調査を実施した。調査の概要は次のとおりである。

(1) 調査対象：

- 1) 広島大学附属中学校 3年生から2クラス
(男女各40名, 合計80名)
- 2) 広島大学附属高等学校 2年生から2クラス
(男子48名, 女子34名, 合計82名)

(2) 調査時期：

1995年12月

(3) 調査方法：

家庭科の授業において附属教官が生徒に対して説明、配布し、後日学校に持参させて回収した。

(4) 調査内容：

- 1) 世代間相互作用調査 食生活における世代間の相互作用に関する質問紙調査。家族構成、共食の実態、調理する人、献立および味付けについての満足度などを質問した。
- 2) 食物摂取状況調査 特定の日(中学生：12月7日(木)、高校生：12月6日(水))について、各食事ごとの食事時刻、献立名、材料名についての記述形式による調査。前回の調査の経験から、中・高校生に食事の摂取量を調査するのはかなり困難であることがわかったので、今回の調査では摂取量は調査しなかった。
- 3) 食物嗜好調査 12種類の食品群についての嗜好および摂取頻度についての質問紙調査。

(5) 有効回収状況

各調査の有効回収票数は次のとおりである。

表2-1 回収状況

	世代間相互作用調査	食物摂取状況調査	食物嗜好調査
中3 男子(40)	33	24	33
女子(40)	37	32	37
合計(80)	70	56	70
高2 男子(48)	42	34	42
女子(34)	32	25	32
合計(82)	74	59	74

カッコ内は在籍人数

Ⅲ 中・高生の食物摂取

(1) 食事に関する調査

本研究における食事調査では、中・高生に一日に摂取した食品名を献立とともに記入してもらった。食事調査につきものである重量測定は、あえて行わず摂取食品の種類数みでの評価を目指した。同じ食品を複数回摂取している場合においても、摂取食品の種類数1とした。また、質的評価として香川による4群の食品群に分類して評価した⁷⁾。

この結果を図3-1に示した。中・高生の男女それぞれで全体的に大きな差異はみられず、一日にほぼ20種類の食品を摂取しているという結果であった。目標とされている30種類と比較して少ないわけであるが、実際のデータを見ると食生活に問題があるというよりは、生徒の記述の仕方の問題があるのではないかとと思われる。したがって、実際は30種類近くの食品を摂取しているものと推察される。今後は、前もって生徒に記述方式を正確に説明した上で検討する必要があるだろう。

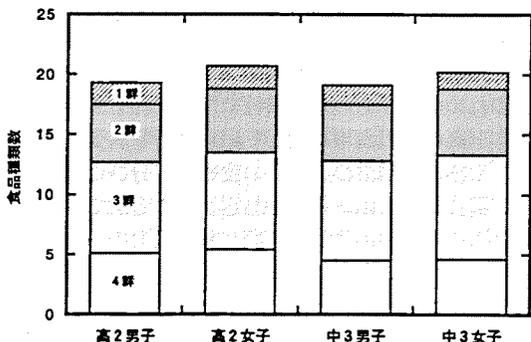


図3-1 一日の各食品群別摂取種類数

各食品群についてみると、日本人が従来、摂取しにくいと考えられてきた乳製品や卵類は、全体的に少なく、わずか平均で1.7種類であった。もちろん各群中の母体となる食品の種類そのものかなりの差があるため、絶対数のみで容易に評価することは困難であるが、他の群が0種類であった生徒が存在しなかったのに対して1群では全体の13%が1種類も摂取していなかった。このことから、やはり1群の食品には注意を払う必要があるように思われる。

1群の食品についてさらに興味深いことは、全体に占める1群の食品の種類数は上記したように比重として、きわめて小さく1割にもみたくない。しかしながら、図3-2に示したように1群を摂取していない生徒の総食品種類数は、摂取した生徒の3分の1にもみたくないのである。もちろんデータの精度にも問題はあろうが、この事実は、1群の食品摂取が日本人において食生活の指標にも成りうる可能性をしめしており、きわめて興味深い。

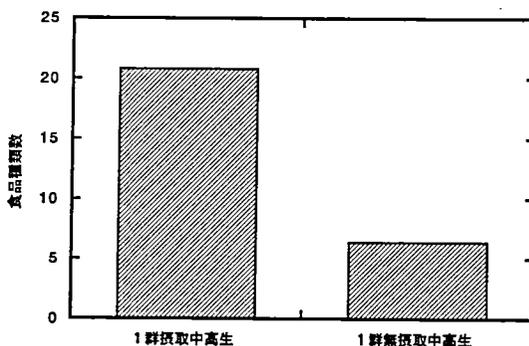


図3-2 1群の食品摂取と総食品摂取の関係

(2) 栄養に関する調査 (12種類の食品の摂取頻度と嗜好)

ここでは、食品の摂取頻度について前報⁸⁾と同様に厚生省の国民調査に用いられている12品目の食品についてよく食べている(毎日)、普通(週に2~3回)およびほとんど食べていない(週に1回以下)の中からひとつ選ばせる方法を用いた。あわせて、食品の嗜好についても好き、どちらでもないおよび嫌いの中から選ばせた。

図3-3に、各種食品の摂取頻度について中・高生をまとめて男女別で示した。左側より男子が「よく食べる」と回答した率の高い順に配列した。全体的に日本の伝統的な食品が下位を占めている。一般的にいわれている食の欧米化を示しているのかもしれない。男女の相違についてみると、甘い菓子類の摂取頻度が明らかに女子で高いことがわかる。女子については食生

活における甘い菓子類の影響について十分考慮する必要があろう。一方、男子は肉類や牛乳などの栄養価の高い、タンパク質源の摂取が女子に比べて高くなっている。これらの結果は、前回の結果ときわめて一致している⁸⁾。

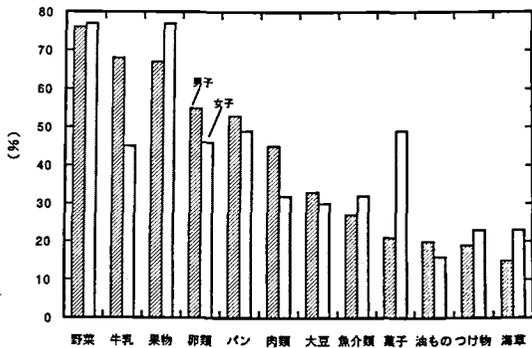


図3-3 各種食品の摂取頻度

各種食品の嗜好(図3-4)については、摂取頻度と全体的に類似した傾向にあり、相関をみると有意な正の相関関係($r=0.53, p<0.01$)がみられた。ただし、男子における野菜は摂取頻度が最も高いにもかかわらず、最下位となっている。嗜好においても女子は甘い菓子類が男子と比較して高くなっている。これらの現象についても前回類似した傾向がみられた。

食品の嗜好と摂取頻度については、簡便な手法で得られた結果ではあるが、興味深い情報がしかも再現性よく得られた。これらの情報についてさらに検討する予定である。

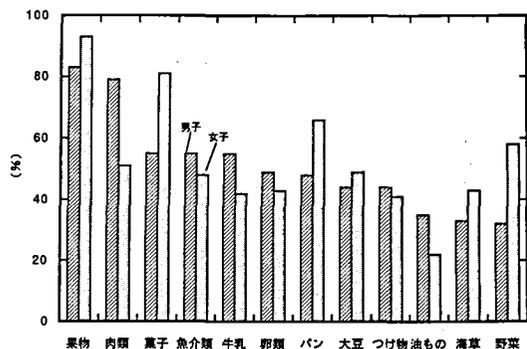


図3-4 各種食品に対する嗜好

IV 中・高校生の食生活における世代間相互作用

ここでは、「世代間相互作用調査」の調査結果に基づき、中・高校生の食生活における両親、祖父母との相互作用について分析する。

対象となった生徒の家族構成についてみると、祖父母と同居している比率は、中学生20.0%、高校生18.9%であり、核家族と大家族の比は、おおむね4:1である。きょうだいがいる比率は中学生80.0%、高校生82.4%である。

(1) 共食と孤食・個食

動物の摂食行動は原則として個人単位になされるのに対して、人間の食事は個人的行動ではなく、社会的行動となっている⁹⁾。原則としては特定の集団の成員間で食物をわかちあって、共食をすることがふつうである。

共食には二つの側面がある。

一つは、集団の成員が同じ時間に同じ場所で一緒に食事をするという時間の共有の側面である。家族集団の場合、異なる世代の成員が食事時間を共有することにより、食事に伴う会話やテレビ視聴などいわゆるだんらんをととして世代間に相互作用が生じる。しかしながら、同じ時間に同じ場所で家族成員が食事することは現代においてはかなり困難になりつつある。食事にかぎらず家族成員が時間を共有するためには共時化するなわち時間あわせを必要とする。

この時間あわせの視点は、一般にタイミングの問題と呼ばれている。時間の希少性が強く意識される工業化社会におけるタイミングの問題に理論的な関心を示したのはムーアである¹⁰⁾。ムーアによれば、社会行動というものは、諸々の出来事を時間の上でどう定位するかという問題をめぐる共通の定義や仮定および行為に依存するものである。このための要素としてムーアは共時化のほかに時間的順序、行為の進度をあげている。

家族成員の共時化が困難な理由は、ムーアによれば、家族成員が家族以外の複数の組織に所属し、その成員をめぐって時間の争奪が生じるからである。企業、学校、地域、塾、個人的友人関係との力関係の中で、家族のための時間あわせが犠牲になる状況も多い。

中・高校生の食事に関していえば、家族全員での食事、家族の一部分の成員との食事、自分ひとりでの食事(孤食)などのケースを想定することができる。

共食の今一つの側面は、同じ献立のものを食べるといふ食事内容の共有の側面である。いわゆる「同じ釜の飯」という意識による結びつきである。二世以上で成員が同じ内容の食事をするとき、どの世代の嗜好にあわせた献立かによって世代間に相互作用が生じる。

高齢者向けの味付けの料理を中・高校生が食べる場合もあるし、中・高校生向けの味付けの料理を高齢者が食べる場合もある。もちろん、中・高校生だけが他の家族成員と献立の異なる料理を食べる場合もある（個食）。

調査では、共食のこの二つの側面について、朝食と夕食の場合に分けて質問した。

図4-1は、第一の時間の共有の側面である「あなたはふだんだれといっしょに朝食を食べることが多いですか。」という質問に対する回答（複数回答）の結果である。中学生と高校生とで結果に大きな違いはなく、父母と一緒に食事をするのは24~30%、きょうだいで一緒に食事をするのは34~37%である。祖父母と一緒に朝食を食べるのは高校生の4.1%のみで、祖父母と同居している中高生だけでみても10.7%である（中学生14人中0人、高校生14人中3人）。注目すべきはひとりで食べる比率であり、中・高校生ともに半数を占めている。朝食に関しては、共食、孤食が半々となっている。

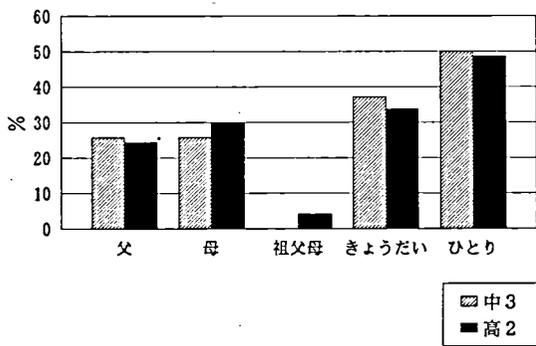


図4-1 朝食を一緒に食べる人

図4-2は夕食を一緒に食べる人についての回答を示したものである。朝食と同様、中学生と高校生とで大きな違いがない。しかしながら、一緒に食べる人の比率は朝食と異なっている。朝食では差がなかった父母の比率に違いがみられ、父は中学生38.6%、高校生45.9%に対して、母は76~80%である。夕食の食卓に父親がいない光景は現代ではむしろ容易に想像できる結果かもしれない。それよりも注目すべきは、父親不在といわれる夕食の方が朝食よりは父親と一緒に食べる比率が高いことである。逆にいえば、いかに朝食が中・高校生にとって孤食化しているかを示しているともいえる。夕食になると祖父母と一緒に食べる比率も9~11%になる（祖父母と同居している生徒の50%）。夕食をひとりで食べる比率は17~18%と朝食に比べると低くなる。

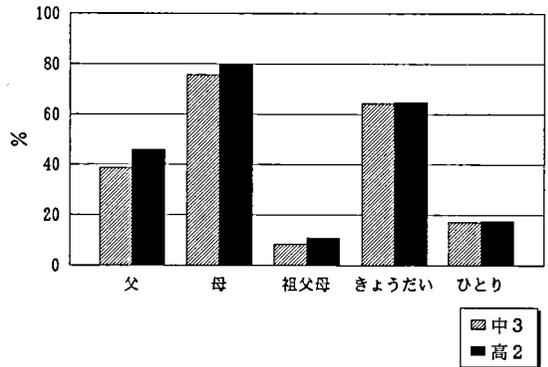


図4-2. 夕食を一緒に食べる人

次に共食の第二の側面である食事内容の共有について検討する。調査では「あなたの朝（夕）食の献立は他の家族の人の献立と違う場合がありますか」という質問をした（複数回答）。図4-3はこの質問に対して「全員ほとんど同じ献立」という回答比率を朝食と夕食について示したものである。朝食は51~55%、夕食は77~79%が全員同じ献立と回答している。夕食の方が同じ献立の食事をする比率が高い。朝食について父親と献立が違うのは29~34%、母親と献立が違うのは27~29%である。祖父母と同居している生徒の57.1%（全生徒の11.1%）は祖父母と献立が違っている。きょうだいで朝食の献立が違う生徒も20%弱いる。夕食については、全体的に献立が違っている比率が低い。

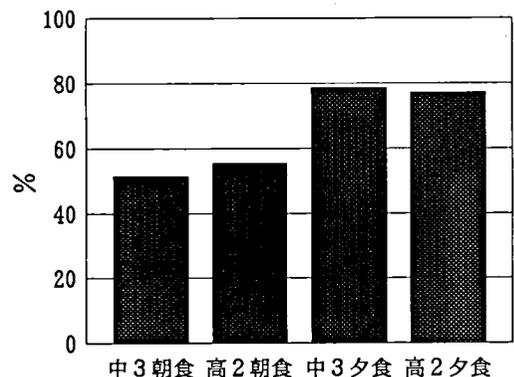


図4-3 献立が家族全員同じ人

共食についての傾向を中・高校生を合計した男女で比較すると、ひとりで食事をする比率は男子の方が高く、献立の内容は、朝食では男女差がないのに対して、夕食では女子の方が全員献立が同じという生徒の比率が高い。

共食と孤食・個食についてももう少し分析しておきた

い。図4-4は朝食と夕食の食べ方の関係を見たものである。朝食をひとりで食べる生徒の25.4%は夕食もひとりで食べるのに対して朝食を誰かと一緒に食べる生徒で夕食をひとりで食べるのは9.6%である。全生徒の8人に1人(12.5%)は朝食も夕食もひとりで食べている。

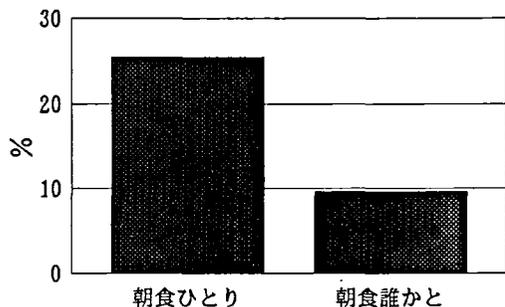


図4-4 夕食をひとりで食べる人

図4-5は共食についての二つの側面、つまり時間の共有と食事内容の共有との関連を示したものである。朝食の場合は、ひとりで食べる人よりも誰かと一緒に食べる人の方が献立内容が全員同じであるという人の比率が高い(ひとりで食べる人45.1%, 誰かと一緒に食べる人61.6%)。しかしながら、夕食の場合は一緒に食べるかひとりで食べるかによっては、献立内容が全員同じである比率に差がみられない。

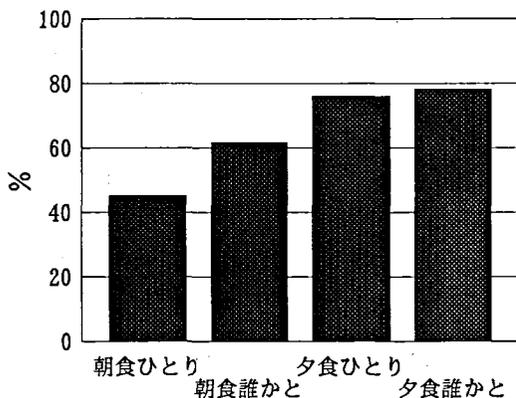


図4-5 献立が家族全員同じ人

(2) 調理する人

食事を作る人が誰であるかは食事内容をはじめ家族の食生活に大きな影響を与える。とくに、祖父母の世代が調理を担当する場合、いい意味でも悪い意味でも

三世代間の相互作用が生じる可能性がある。

「朝(夕)食を作っているのはだれですか」という質問(複数回答)に対して、ほぼ90%以上の回答は母親であった。父親は朝食4.9%, 夕食2.1%である。祖母という回答は朝食2.1%, 夕食4.2%であり、祖母と同居している生徒だけについてみると朝食12.0%, 夕食24.0%である。生徒本人が作る比率は朝食11人(7.6%), 夕食5人(3.5%)である。

ただし、生徒本人が作る場合、朝食は11人中9人、夕食は5人全員が女子であり、家事労働を、生徒段階においても女子が男子より多く分担しているといういくつかの調査結果を裏付ける結果となっている。

(3) 献立および味付けに対する満足度

中・高校生は食事の献立や味付けについてどの程度満足しているのであろうか。調査においては、朝食と夕食について、献立の満足度と味付けの満足度を質問した。

献立については、中学生の61.4%, 高校生の56.2%は朝食の献立に「常に満足」している。夕食の献立については、中学生の65.7%, 高校生の62.2%が「常に満足」している。

味付けについての満足度は献立の満足度よりも一般に高く、朝食の味付けについては中学生の90.0%, 高校生の82.4%が「常に満足」している。夕食の味付けについては中学生の85.7%, 高校生の73.0%が「常に満足」している。全体的に、中学生よりも高校生の方が献立や味付けに対する満足度が低い。

共食・孤食・個食と満足度との間には関連があるであろうか。

共食の第一の側面である時間の共有と満足度との関係とみると、献立、味付けともにほとんど関連がみられない。つまり、食事を一緒に食べるかどうかということは満足度に影響していない。

図4-6は共食の第二の側面である食事内容の共有と献立の満足度との関連を見たものである。朝食の場合も夕食の場合も献立内容が全員同じである生徒の方がそうでない生徒よりも献立に対する満足度が高い。味付けについての満足度についても同様の結果が得られている。家族成員の献立が全員同じでない場合の方が、献立や味付けについての生徒の満足度は低くなる。献立が全員同じでないということは、家族成員のなかでいくつかの食事の選択肢が用意されているということであるが、そのことは、少なくとも生徒にとっては献立や味付けの満足につながっていないということは注目すべき結果である。

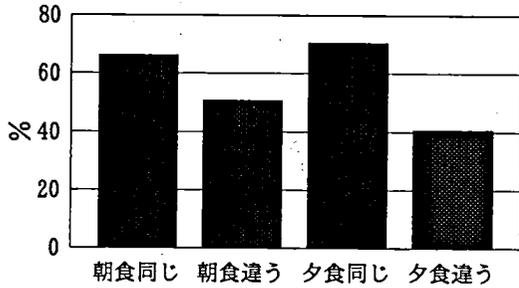


図4-6 献立の満足度

献立や味付けについての満足度は、三世帯居住の影響を受けるであろうか。祖父母と同居している場合、その家庭での献立や味付けは祖父母の嗜好にあわせたものになるのか、あるいは生徒の世代の嗜好にあわせたものになるのか。そうしたことが生徒の満足度に影響を与えるであろうか。

図4-7は、祖父母との同別居別にみた朝食と夕食の献立の満足度を示したものである。朝食については祖父母と同居しているか否かは満足度にほとんど影響を与えていない。しかしながら、夕食については、祖父母と同居していない生徒の69.0%が献立に「常に満足」しているのに対して、祖父母と同居している生徒では「常に満足」しているものの比率は42.9%である。この相違は味付けの満足度についてもあてはまり、同じく朝食については差がないのに対して、夕食については祖父母と同居している生徒の方が満足度が低い。

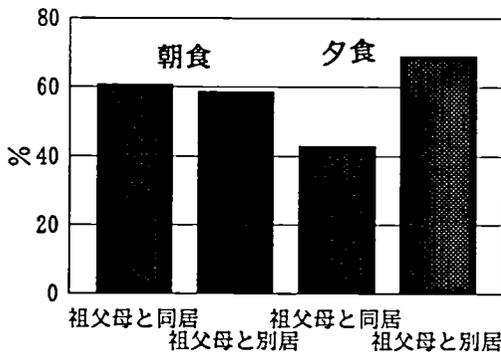


図4-7 祖父母との同別居別にみた献立の満足度

朝食について差がないのは、たとえ祖父母と同居していても祖父母とは献立が違う生徒が多いからではなからうか。これに対して夕食については、祖父母と同じ献立を食べる生徒も多く、その内容が生徒にとって

必ずしも満足を得られるものでないのかもしれない。

V 食生活の世代間相互作用からみた食物摂取

本研究の目的は、家庭生活を中心とした人間生活を総合的に検討していくことである。ここでは、これまでに述べてきた食生活に関する摂取食品種と各食品に対する摂取頻度および嗜好性についての内容を世代間相互作用という観点より検討する目的で、孤食と高齢者の影響について考察する。

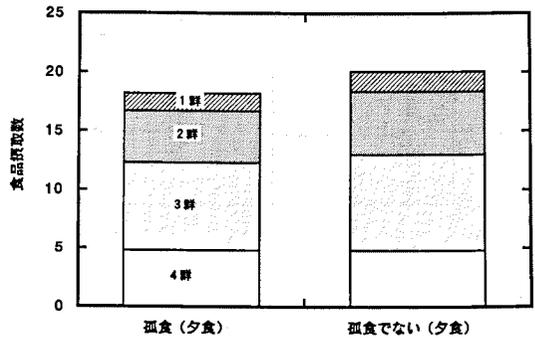


図5-1 孤食の各食品群別摂取種類数への影響

ここでは、孤食をひとりで食べるという意味で考えている。図5-1に各食品群別摂取種類数への夕食における孤食の影響について示した。興味深いことに、各食品群とも孤食の生徒の平均数が、そうでない生徒の平均数を上回ることにはなかった。その結果として摂取食品種の総数も下回った。また、この結果を支持するように食品の摂取頻度および嗜好性に対する平均値においても孤食の場合が、そうでない場合を明らかに下回った(図5-2)。食生活における孤食については懸念されている。しかしながら、孤食の栄養学的問題点の実証については十分であるとはいえないよう

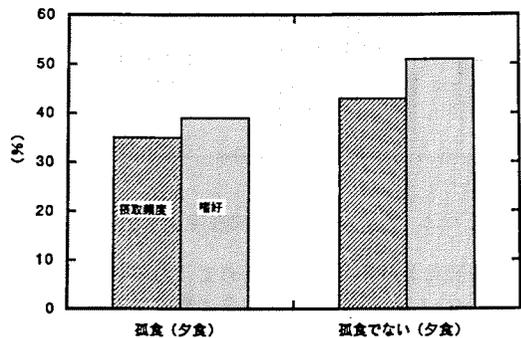


図5-2 食品の摂取頻度及び嗜好に対する孤食の影響

に思われる。したがって、身体的な因子も評価の対象としてさらに検討する必要がある。

図5-3には高齢者の食生活への影響をみる目的で、三世帯同居の各食品群別摂取種類数への影響を示した。各々の食品群においては傾向は一致していないが、全体的には三世帯同居の摂取食品種類数が低い傾向と

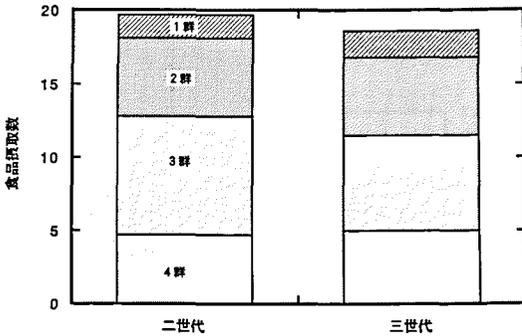


図5-3 高齢者の各食品群別摂取種類数への影響

なった。さらに図5-4に示されたように、各食品の摂取頻度、各食品に対する嗜好度ともに、若干、三世帯同居のグループが低い傾向を示した。同居する世代と食生活との関係については、わずかに、三世帯同居の高齢者の栄養と高齢者のみで生活している高齢者を比較した場合に、後者の方が栄養状態がよいのではないかということを示唆した研究がある。本研究の結果とこの報告を考え併せると、高齢化社会に向けて重要な問題であるといえよう。

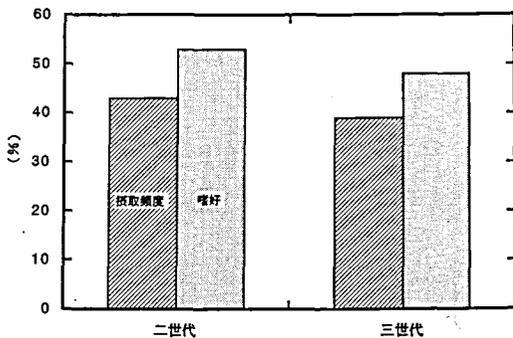


図5-4 食品の摂取頻度及び嗜好に対する高齢者の影響

本研究における手法はきわめて「おおまか」である。しかしながら、それぞれの結果は驚くほどの共通性がみられる面があり、それなりに意味があったと思われる。

VI 結論と今後の展望

本研究では、家庭管理学的な側面を加味した食生活上の世代間相互作用をとらえることを目的とした。

本研究で明らかになったことは、対象となった中・高校生家庭での食生活には、「生徒個人」が強調される個人的な食生活と「家族」が強調される集団的な食生活があることである。

他の成員とは異なる献立で自分ひとりで食べる食生活がある。ここには、食生活の面でも家庭経営的な面でも世代間相互作用はあらわれにくい。家族全員が同じ献立で全員一緒に食べる食生活がある。とくに三世帯同居の場合、多様な意味の世代間相互作用が生まれる可能性がある。実際の食生活はこの二つの極を含む中間にあり、献立は同じだが時間帯がずれていたり、時間は共有していても献立が違ったりする形態をとる。

生徒の視点からみた場合、献立が家族共通でない場合や、祖父母と同居の場合の夕食においては、献立や味付けに対して必ずしも満足度が高くないことも明らかになった。孤食や三世帯同居の栄養学的影響も示唆されている。

食生活における世代間の相互作用は、本稿のはじめに述べたとおり、家庭科における栄養分野だけの問題ではなく、食事の仕方や調理の分担などの家庭管理の問題でもあり、とくに三世帯同居の場合には、家庭管理の空間的側面をになう住居の問題でもある。本研究において、こうした各分野を総合することについて十分でなかったことは認識している。今後の課題としたい。

最後に、今回の調査の中には含めることのできなかった住居の問題について、住居学的視点から世代間の相互作用について考察しておきたい。

現在の日本社会において、65歳以上の高齢者の住まい方を考察することは重要な課題である。今日の核家族化の進行とともに、高齢者夫婦世帯や高齢単身世帯の比率がかなり高くなりつつある。日本は伝統的に、高齢者の（子世帯などの）同居率が高い国であったが、近年65歳以上の高齢者の同居率が低下し約52%（1990年）になったと言われている。住生活の面よりこの同居について検討すると、例えば「儒教的な思想に基づいて親の面倒を見る」ことよりも、「住宅取得が困難であるため」や「親子で生活したいため」などの理由が徐々に挙げられるようになり、経済的な側面も同居の大きな一因となっていることが窺える。これらの同居を経済的に支援する方法の一例として、住宅金融公庫の融資制度の中に、「二世帯住宅貸付制度」、「親子リレーローン制度」および「老人同居多人数世帯割り増し貸付」などがある。好条件とは言えないまでも、

現在のところ、これらの制度は有効な方法と考えられている。今回の調査における高齢者の三世帯同居率は19.4%（144世帯中28世帯）であり、全世帯に対する全国平均13.1%（1992年）より少し高い。これは調査対象が地方都市（広島市）であること、および比較的祖父母が健在な中等学校の生徒を調査対象としたため、全国の平均値よりやや高くなったものと考えられる。

建築的に見る同居のタイプとしては、①玄関は1つであるが、内部を住み分ける完全同居型タイプ。②玄関を一階に2つ設け、上下階（または2領域）を親世帯と子世帯が住み分ける準同居型タイプ。この場合、内部にも階段や扉があり親子の交流が簡単に行われる。③上下階（または隣り）に住み分け外階段（または外扉）でのみ行き来できる隣居型タイプ。この場合一般的には全く別の世帯と見える。以上よりこれら3タイプが考えられるが、今回の調査では同居のタイプについて詳しい回答を求めているため、一応、第一例の完全同居型タイプと考え全体の考察を行っている。

家族の食事の形式より、同居における食事室のあり方について検討する。同居形式の中には、食堂が1つだけの場合、主食堂と副食堂が各1つの場合、および主食堂が2つ、すなわち親世帯と子世帯が別々に食事をする場合の、計3タイプが考えられる。今回の調査を基に食堂のあり方について、夕食と朝食に分けて考察する。まず夕食について同席者を見ると、同居28世帯の中14世帯が高齢者と孫と一緒に食事をしている。したがって主食堂は同居者の重要なコミュニケーションの場となっていると考えられる。また、28世帯中6世帯については、親世帯と子世帯との夕食の献立が全く異なることより、これらの家族については将来的には主食堂が2つに分かれる可能性を示している。次に朝食に注目すると、高齢者と孫と一緒に朝食をとる家族は28世帯中3世帯ときわめて少なく、また朝食の献立についても28世帯中16世帯で全く異なった朝食を食べている。これらの状況より副食堂の分離はかなり早い時期に行われることが考えられる。また、副食堂が分離しない場合の方策としては、朝食時間のズレ、すなわち朝食時の時差が行われているであろうと推察される。

以上のように、高齢者との同居家族においては、夕食をコミュニケーションの場と考える一方、朝食については個々の世帯（親世帯、子世帯）の別々の家事の1つと認識して、今後とも副食堂は分離・独立の方向に進んで行くものと考えられる。また、同居の形式としては、完全同居型タイプから準同居型タイプや隣居型タイプへ向かう傾向にあると推察される。

引用文献

- 1) 平田道憲, 岩重博文, 木下瑞穂, 片山徹之, 鳥井葉子, 日浦美智代, 「家庭生活における栄養・運動バランスの評価に関する研究」, 『広島大学教育学部学部附属共同研究体制研究紀要』第23号, 123-132頁, 1995年
- 2) 岡本祐子, 福田公子, 小林京子, 三宅美与子, 西敦子, 「高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究 I」, 『広島大学教育学部 学部・附属共同研究体制研究紀要』第21号, 145-155頁, 1993年
- 3) 岩垂芳男, 福田公子, 『家政教育学』, 福村出版, 1990年
- 4) 文部省, 高等学校学習指導要領解説, 家庭編, 実況出版, 1989年
- 5) 山田弘明, 『方法序説』を読む, 世界思想社, 1995年
- 6) 平田道憲, 岩重博文, 木下瑞穂, 片山徹之, 鳥井葉子, 日浦美智代, 前掲論文
- 7) 科学技術庁資源調査会編, 四訂食品成分表, 女子栄養大学出版社, 1996年
- 8) 平田道憲, 岩重博文, 木下瑞穂, 片山徹之, 鳥井葉子, 日浦美智代, 前掲論文
- 9) 日本家政学会編 『食生活の設計と文化』朝倉書店, 1992年
- 10) W. E. ムーア (丹下隆一・長田攻一訳), 『時間の社会学』, 新泉社, 1974年

参考文献

- 1) 伊東明子, 園田真理子: 『高齢時代を住まう』建築資料研究社, 1994年
- 2) 総務庁統計局: 『日本の統計』大蔵省印刷局, 1992年
- 3) 佐藤, 小滝, 三宅: 『高齢者にやさしい家づくり』ニューウハウス出版, 1991年